

# 琉球大学学術リポジトリ

## 日本人健常者における曖昧さへの態度について

メタデータ	言語: English 出版者: 琉球大学 公開日: 2017-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 榎木, 宏之, Enoki, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36925">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36925</a>

平成 29 年 5 月 8 日

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	榎木 宏之
		審 査 日	平 成 29 年 4 月 21 日
論文審査委員		主査教授	高山 千 利 
		副査教授	石内 勝 吾 
		副査教授	石遠 藤 光 男 
( 論 文 題 目 )			
Attitudes Towards Ambiguity in Japanese Healthy Volunteers			
( 日本人健常者における曖昧さへの態度について )			
(論文審査結果の要旨)			
<p>上記論文について、研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。</p>			
<p>1. 研究の背景と目的</p> <p>曖昧さは、ある状況を明確化するためや理解をするための十分な手がかりがないために生じる非構造的未分化的状態と定義されている (Budner, 1962)。この曖昧な状況は、生活場面の至る所に存在しており、それに柔軟に対処することが心理的安定のために求められる。曖昧さへの対処についてはこれまで主に「曖昧さへの耐性」という概念によって研究されてきた。これは、曖昧さへの対処を耐性の程度によって 1 次元的に捉えるものであるが、曖昧さへの肯定的認識を包含していないという批判がある。その中で、最近提出された曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007) は、曖昧さへの否定的な態度や反応パターンと同時に肯定的な態度や反応パターンを多次元的に評価する画期的な自己記入式尺度である。しかし、尺度開発時の調査対象者が学生のみ若年層に限られているため、一般成人を含む臨床群に一般化するには限界がある。そこで、本研究では、同尺度の精緻化を目指し、一般成人を対象として、曖昧さへの態度尺度の因子構造の再検討を行った。そのうえで、抽出された因子間の関係から曖昧さへの態度の認知的・感情的側面と反応傾向的側面の構造を特定化すること、曖昧さへの態度と年齢や性との関係性を明らかにすること、曖昧さへの態度と近接する構成概念である「心理的柔軟性」との関係を検討することを行った。</p>			
<p>2. 研究内容</p> <p>対象者 1,019 名の日本人健常者 (女性 513 名, 男性 506 名, 年齢 18~78 歳) に対して、曖昧さへの態度尺度 (Attitudes Towards Ambiguity Scale : ATAS; 西村, 2007) と「心理的柔軟性」を評価する心理学的尺度である日本語版 Acceptance and Action Questionnaire (AAQ; 松本・大河内, 2012) によって質問紙調査を実施した。</p> <p>結果として、探索的因子分析および確認的因子分析により、先行研究 (西村, 2007) の 5 因子構造とは異なる 4 因子構造が抽出され、それぞれ「享受 (Enjoyment)」、「不安 (Anxiety)」、「排除 (Exclusion)」、「不干渉 (Noninterference)」と命名された。そして、4 因子間の相関</p>			

関係から、曖昧さへの不安は排除と結びつき、享受は排除と不干渉の相反する二つの行動に結びつくことが示唆された。さらに、これら4因子を態度の認知／感情的側面と行動傾向的側面、積極的／力動的側面と消極的／静的側面の2次元の枠組みの中に位置づける仮説的モデルが提案された。

曖昧さへの態度と年齢や性との関係の検討では、不安因子においてのみ、若年と女性において強い傾向が認められた。

「心理的柔軟性」との関連においては、不安因子は「心理的柔軟性」のWillingness因子と負の相関を示した( $r = -.39, p < .001$ )。一方で、享受因子は、「心理的柔軟性」の下位尺度Action因子との間で正の相関( $r = .40, p < .001$ )が認められた。

### 3. 研究結果の意義と学術的水準

本研究は、先行研究の曖昧さへの態度尺度を精緻化する目的で大きなサンプルを用いて再検討したもので、オリジナリティには欠けるが、初期の研究目的を達成し、曖昧さへの態度の因子構造を明確にすることや曖昧さへの態度について2次元の枠組みによる仮説的モデルを提案することに成功している。さらに、得られた知見をもとづいて、各種臨床疾患の特性を曖昧さへの態度を切り口として探っていくことや、それをもとに臨床心理学的治療法の開発につなげていくことなど今後の研究の発展性が大いに期待されるものである。

研究全体を通して、曖昧さの概念やそれらと使用した質問項目との整合性についての検討、サンプル抽出段階の手続き、因子決定手続き等で少々荒削りな面が認められはするが、萌芽的研究として十分な学術的研究レベルに達しており、今後の発展が期待される貴重な研究知見を提出している。

したがって、本研究は学位授与に十分値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。